

選句 「わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神」 (15)

- 1、 キリスト教は「出会い」の宗教だと言われます。これは「まとめられた使信」(信条、信仰告白、教義、教理)が中心の宗教ではないということです。地上の宗教ですから、儀礼、教義、組織を必要最小限度維持しています。しかし、それが肥大化し、固定化して弊害を持つ時、いつも改革が起こされてきました。16世紀の「宗教改革」然り、20世紀のラテン・アメリカの「解放の神学」然り。「出会い」と「教義」の関係を譬えれば、「山」と「地図」の関係でしょう。山は登る度に新たな体験です。地図は絶えず書き直されても手引きにすぎません。「なぜ山に登のか・・・山がそこに在るから」と先人がいった名言があります。これを「山との出会いの関係」だとすると、「地図」は「山への理解」です。これを「信仰」の世界になぞらえますと、「出会い」は「神との関係」、その投影としての「人との関係」です。それを「神関係」と表現しますと、もう一方は「神への理解」その投影としての「人への理解」です。今日のテキスト、パウロにそくして考えると次のようになります。

- 2、パウロが「わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神」(15)という時、これはパウロの「神関係」ですが、これは終始変っていないのです。ところが「神への理解」の方は、パウロは大きく変わっていくのです。彼は過去を振り返って自分が「ふるまい」(13)の人であったと述べます。二つの「ふるまい」、即ち「神の教会を迫害」した者、「先祖からの伝承(律法)を守る」に人一倍熱心であった者、と記されています。ところがこの「ふるまい」が変わるのです。「律法による神理解」に基づいていたものが180度変わります。「イエス・キリストの啓示によって」(12)変えられたというのです。パウロはこれは「人間から受けとったわけでもなく、教わったわけでもないのだ」(12 田川訳)と強調しています。「イエス・キリストの啓示」とは彼にとっては具体的にはダマスコ途上の体験(言行録 9:1f, 22:4f, 26:9)を指していますが、内面的には、律法による「ふるまい」の生活(律法によって救いを求めた自己実現の生活)に行き詰まったことと考えられます。律法の行いをよしとする神は、行えない者には裁きをもって臨む「強い」神でした。彼は行き詰まって、限り無く「弱い」自分に気が付いたのです。その「強い神」に耐えられなくなった時、十字架の苦難と死をもって自らを表す、限り無く「弱い神」を、「啓示」(神の働き)によって示されたのです。それは気が付いてみればイエスの十字架の出来事によって理解された神との関係でありました。その神は、弱いパウロを限りなく包み込む、恩寵の神であったことに気が付きます。「神関係」は変わらないが「神理解」が「律法の神」(強い神)から「十字架の神」(弱い神)に変わったのです。

- 3、パウロは、以後「ふるまいの人」から、神の恩寵の関係にすべてを「委ねる人」に変えられました。わたしたちの生き方を顧みると、絶えず、「恰好を」をつけて生きています。「恰好をつける」時には、自分本位、自己実現の生き方が前面に出ています。そこを絶えずイエスの十字架の死にあづかって己に死ぬことが大事なのです。「主にありてぞ、われ死なばや、主にある死こそは、いのちなれば」(讚美歌54年版361・2節)。この「死にあづかる」(ロマ6:4)しるしが洗礼の深い意味です。「出会い」を「クロス・エンカウンター」(造語)と表現した人があります。クロス(十字架)を媒介とした「出あい」を大切にしたいといもいます。